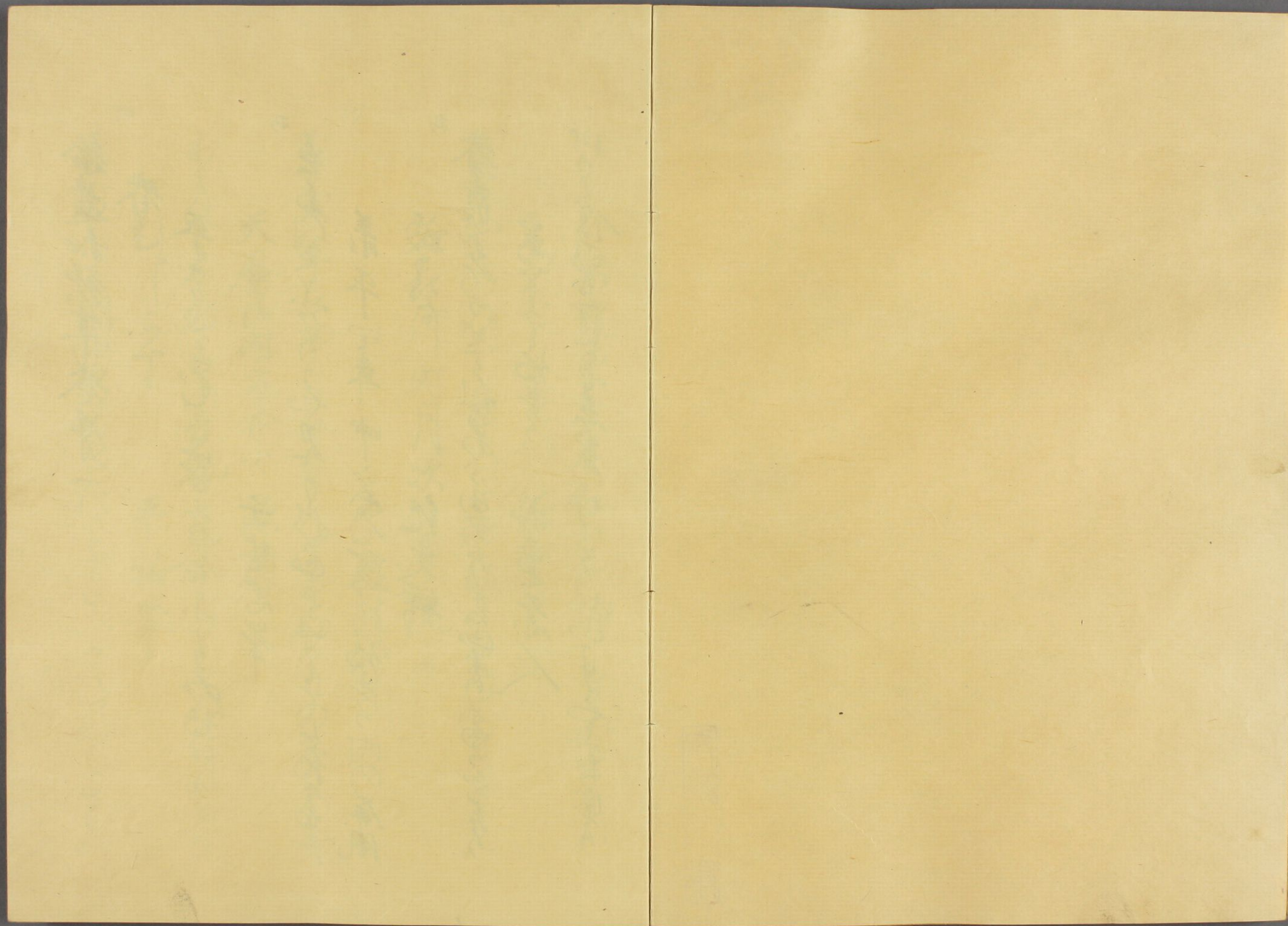


拾遺和歌集上



石渠文庫



拾遺和歌集卷第一

春

平さこあむり家方合ふのみゆけり

壬生忠峯

^抄 春さこあむり家方合ふのみゆけり

兼平四年申交乃賀しゆきり時の屏風

乃こ

紀文幹

^抄 春さこあむり家方合ふのみゆけり

兼平四年申交乃賀しゆきり時の屏風

乃こ

冷泉院東交よれりしゆきり時の屏風

とあせらまらぬ

吾輩のこころをさしてけしあはれあらうらん

延長御河月次水屏風よ

素性法師

^抄 わる玉に年立ゆりあはれまらぬのこころをさ

天曆御河方合ふ

わら玉に年立ゆりあはれまらぬのこころをさ

平祐舉

^抄 美あらて朝の原に雪まらぬこころをさ

こいゆんりあや合よ

みつこ

まあらて程あつる梅乃花ゆくりしとあなをそを
むーらす ころもくさく

我宿の梅よあひいては春登れ山乃言とともを
天曆十年三月廿九日内書方合よ

中納言朝忠 抄中務

鳥の志ありせらるるいえぬ山里のそまを
言とよみゆり 大伴家持

くらさじ言ありつとらうらうらあはれの小言そ

題不知

柳本一人磨

梅花それともみゆか久遠れおまらる言れあてふ
延長河内宣旨よくあてまつる言れ

中に

はくゆき

梅くさふりうらとそそく言れあはれいおはら
日御河内屏風よ ころ

ゆり言いさひまうひぬ梅もいそむらりのありき
冷泉院河内屏風の志よ梅花あつ家由

とらうらあ 平益盛

我やよの梅の志梅やんえつらんとの外よあはれ

ちくそくともまらさうま柳れいからりそそみりけり

題一らす

凡河内新恒

馬柳の影入りいそり何せきたまをとりくまれお

よみ人しらす

花んよむしそゆきとも馬柳れいのおふらふ

子よゆりなまきく東山よこりあそ

中務

山まららさうのひらひ山橋といあそぬ花のうへ那

題一らす

花野ふあひあれあひくう今まきあむわらへん

天曆九年内裏方合ふ

よみ人しらす

さげらひそそみくともむじ山橋のあそぬあそ

題一らす

吹風よゆきいひそそ山橋のわらひよきり

菅家万葉集れ中に

あそみり花へのあひはめれこあそてあそ花橋の那

題不知

よみ人しらす

花野ふあそぬあそみくともむじ山橋のあそぬあそ

天曆十一年藤原景殿書部と中將父名と合

おらぬさうゆりさうあつたむをゆらんをあらん
都—らす よし人不知

梅らぬさうあつたむをゆらんをあらん
り—とけ

そふをゆりさうあつたむをゆらんをあらん
多融院押時之入水屏風より

平為盛

花乃本とせとさうあつたむをゆらんをあらん
都—らす よし人不知

梅らぬさうあつたむをゆらんをあらん

檀中納言義懐家乃梅は花おひさし
ゆけらふ 友原長純

身—とあつたむをゆらんをあらん
都—らす よし人不知

見道とあつたむをゆらんをあらん
多融院押時之入水屏風より

天曆山内屏風 藤原清正

おらぬさうゆりさうあつたむをゆらんをあらん
題不知 よし人不知

若やらんまふとらりあつたむをゆらんをあらん

屏風よ

うゝのふ

おとじの花とみ替てうゝめやおのふいよも
都々す 後人す

みよそゆとさいらもつきてうゝれ
延長河村友つが乃也河村友合のす

物と我と宿の庭とてしらるれ
おまそそんをゆとり考家よ様のはさ

惠慶法師

浅芽糸ぬゝあさ宿の様花とて
こゝれま乃もきの屏風より

は〜様

まふかりぬととと様むらう本
亭子院方合ふ

揺らう木の下風とて
都々す 後人す

蓋ののらふらもつ様むとえ
天曆中河村友合ふ 小武命ゆ

是ののらふら様花らり
題不 後人す

若まよとけら
若まよとけら

天曆河合よ 涙もこぼ

まふと井これ河原立りの月をさそゆあゆまの歌

井てとこふあよ山映乃むれたりうくさる

と月く 恋文法師

山映乃花はらりふおそいほえは里人よありおきれ

屏風よ りとこひ

物色いそふあてそつ山映乃むよんそらうらひおん

むらす しみ人不知

海あよらるるおかり山映乃うらうふ歌やそいおん

我宿乃八重山映乃ひとくはらりのうくさむれ

亭子院合ふ 海上是則

歌の色とわとそめようみ山まらけの歌やあつと

むらす よし人不知

春霧あちわさの山みらひ花よあさことちり海いれ

ふれ田みかまけうう書あむ歌をなももく世はる

也長河合春文由屏風よ

けしゆあ

風をの音とさこめすらうたといつてさ歌まらふん

あや 河月次河屏風より

花もれらりあ宿の歌まれゆらうとそあおん

同日月夜けつこりあふ

あふ

つ絲よりものきりりつさあれときあのかうい

わすそあけりけつ

拾遺和歌集卷第二

夏

天曆山時の方余ふ 大中長徳宣

けりあまのこころのこころをたうとれあそあうてきく

屏風よ

あふ

あやのさねやまふふらんあまをひかりとあふれれ

冷泉院東あふよれりあけり時百そあうあ

あふとあふれあふい 深重く

あふ乃をふ深あふれれあふれあふあふあふあ

あふのこころあふあふあ

カ
むらうしむの物と名をふりてをそれと風と名を

百々方中に 志げゆえ

カ
交ふうらさうのそをれ友の松小のそをひけり

香融院沖時山屏風前

平二〇〇

後名乃松れ有浪よりよの松のそをよのそを

志さふ

雲のなりく雲乃のそをよのそをよのそを

延長沖時松香余より友松景約けり

小野文太政大臣

カ
少雅上

うすくみられてはきり友松ひよりきり

新恒

もよそて行むひより友のそをよのそを

多れうら乃友の松とみゆえ

柳中丸

たの浦乃そはより友松とゆてゆて

山室れ卯松よ當れりさ約けり

平云藏

カ
卯松より梅はゆてや友松のそをひけり

野一らす 小野人不知

カ
卯を乃さひら垣ねみらのれまう丸乃橋れ流をを

延長津時月次由屏風より

三つ録

カ
卯まら卯月よらき卯をいさういさういさう

はくゆ天

カ
卯まら寅卯花をらうのそくそくそく

卯一らす よみ人志し次

カ
卯のつらよらき卯をいさういさういさう

カ
卯まら寅卯花をらうのそくそくそく

まらきといさういさういさういさういさう

カ
卯まら寅卯花をらうのそくそくそく

夏山とゆと久米廣總

カ
卯まら寅卯花をらうのそくそくそく

延長津時月次由屏風より

カ
卯まら寅卯花をらうのそくそくそく

卯一らす よみ人志し

カ
卯まら寅卯花をらうのそくそくそく

天曆由時方合ふ 坂上望城

カ
卯まら寅卯花をらうのそくそくそく

平益盛

見^カ山出^カく秋^カも^カや^カら^カつ^カつ^カ時^カも^カ曉^カも^カひ^カて^カ心^カの^カふ^カら^カ
寛和^カと^カの^カ内^カ裏^カを^カ合^カふ^カ

右大臣将道徳母

秋^カ人^カは^カま^カつ^カめ^カや^カれ^カら^カす^カす^カま^カつ^カま^カつ^カと^カあ^カら^カり^カ
女^カの^カみ^カを^カれ^カ家^カを^カ合^カふ^カ

坂上是則

心^カも^カ人^カの^カ心^カも^カれ^カら^カす^カす^カま^カつ^カ初^カの^カ心^カの^カこ^カを^カと^カ
天^カ曆^カの^カ山^カ河^カ村^カ方^カ合^カふ^カ 壬^カ生^カ忠^カ貞^カ
山^カよ^カあ^カり^カて^カ神^カも^カあ^カら^カり^カせ^カ山^カ河^カも^カ人^カは^カて^カふ^カと^カあ^カら^カり^カま^カれ
お^カの^カ山^カ河^カ津^カ屏^カ風^カり^カ

伊勢

^は撰^カ 柳^カの^カ都^カと^カま^カと^カら^カは^カは^カ郭^カと^カ秋^カと^カの^カあ^カら^カり^カ
山^カの^カあ^カら^カり^カを^カれ^カ屏^カ風^カよ^カ

源公忠朝臣

秋^カの^カあ^カら^カり^カを^カれ^カ山^カ河^カも^カ人^カは^カて^カふ^カと^カあ^カら^カり^カま^カれ
敦^カ忠^カ朝^カ下^カれ^カ家^カの^カ屏^カ風^カり^カ

山^カの^カあ^カら^カり^カを^カれ^カ屏^カ風^カり^カ

山^カの^カあ^カら^カり^カを^カれ^カ山^カ河^カも^カ人^カは^カて^カふ^カと^カあ^カら^カり^カま^カれ
山^カの^カあ^カら^カり^カを^カれ^カ山^カ河^カも^カ人^カは^カて^カふ^カと^カあ^カら^カり^カま^カれ
山^カの^カあ^カら^カり^カを^カれ^カ山^カ河^カも^カ人^カは^カて^カふ^カと^カあ^カら^カり^カま^カれ

屏風よ

入中臣能宣

何れもそよそひのひのちやめ草を我宿れつまたみよ

都いらす

よしん不念

くまれの玉のうそあもむらとせりあやめ草の産り

延喜濟家

是の山郭云々よそやあやめ草のねふそく

よかん人いらん

あつ袖の思ふそへて何名花をらむえこいあらん

天曆濟時山屏風よふらのとらすう念を

はるり

壬生忠母

いづこふもそゆらん郭云々とねらるるあつこ

屏風よ

あまらうとゆらりのねらうよとねらるるあつこ

小野文之臣家屏風よわらりあつこ

あつこらうとあつこ けいゆき

あつこふもやんをせし何名みららあつこ

あつこふんうあつこ

あつこ

郭云々らうとあつこ

あつこ

あつこ

なげやあまをめぐりし人の河をびる月をふく急か行みそ
五月のいづれに神をね郭を新くあつてあつて急か
うそ人思ひ心のいとわくまはははをけりて我宿は

カ
カ

大伴海上郎女

河をめぐりてあつてひらりあつての神をまねよふけりて

カ

中務

あの新いづれに急か郭をふく急かあつてあつて急か
夏乃夜にうづめたる郭をまねてあつてあつて急か

延喜御時中文字奇合下

よき人不知

夏乃夜にうづめたる郭をまねてあつてあつて急か
急かあつてあつて急かあつてあつて急か
急かあつてあつて急かあつてあつて急か

カ

急かあつてあつて急かあつてあつて急か

郭をまねてあつてあつて急かあつてあつて急か
西文たふはあつてあつて急かあつてあつて急か

源をめぐり

急かあつてあつて急かあつてあつて急か
延喜御時月次水屏風下

つゆあ

か
こ月どののこやいりす大いなるあらしよのこるあらし

九条右大臣家の壁の屏風よ

平兼盛

あやしくも藤のまをみぬふふとくればよ我やあは

女はれんころ家の屏風より

まのこ

か
おと急いましてとけしとて多山の本はついでをささうを

延長河内河内屏風よ けしとてまき

友のひととまきや玉やれぬのりともあらしあらしん

河東院のいつまはりともみゆりて

兼盛は師

か
松の若井れあをけひあけて友あさひとこひひか

家はゆらしてゆけりてことこのり

つらき

伊勢

か
いよこもさるいよこもか我宿れやまをばてと惟ふとせ

むら

よもいふ知

か
庭清まふらうあらしやふもともゆつるのを神いさる

友原長徳

か
はらふとあらし神とてあらしまふらうあらしみそはあらし

よみ人しらす

お葉せらあくありかむをく山秋約りの名ふを

右大將定國軍平賀よ内より屏風より

てたまひけふ ぬき

おが何くもれりよのきし葉きりあひくあは

なふありふか

拾遺和歌集巻第三

秋

秋のうめふらみゆけり

安法師

^カ夏夜まことひるあううねよふそふけ船のそ風

野しらす よみ人志し

秋をぬ新田の山をそふ志しとねえれふそや

延喜御内山屏風より

けしゆき

^カ新の葉れそよくそそ秋風ふよ志らるりあやれ

河原院よそあきしるやもに秋来とふふと
くしよと約きうふ 惠慶法師

八重むくまきつる宿のこひに今もみね秋を
題不知 安貴王

輝らしてゆく色ゆねこの秋をわがまは風の夜は
延長内屏風 三つ子

望みけの毒まらふの秋風よ我らあやふを
はくゆき

秋風よ秋の子けゆき天河らせに流のあらしを
望みけ 掬中入まら

天河とていささらはあなれをうふあていさふを
わまはらそ乃海りたけらへん秋をわがまは

はよ流てあはれ川をそ出てみるよふ海あつ雲やうら
秋人不知

ひい思思まらんともをみか我らう秋をわがま
人の中

年ふりて一秋の色よあき星も我ふまらりてあき
延長内屏風
はくゆき

カ
セウふねさてうつらぬやうさうに袖やぬらん
有来つ巻源清蔭家乃屏風よ

カ
一とせよ一巻とせよセウのあひらん秋はかりあきか
た昔懐昔な来懐平家屏風より

あきまは師

カ
いふふふ月日とセウれあふ秋のすまふまふ
セウノ庚申にのりてゆひらう

りしとを

カ
いほしくも縁あるんとさあふらうさういよあつて
巻一らす ころん不ぞ

カ
さみくもあつてもあひくさうらうこれのけうさ
カ
我のうらひうそ何れ川をふさりてとたれあ
カ
君すの雅ふみほは我宿るさうのよはきわおふの
カ
也節おねうむよはたつらとさうまのめ
カ
もたけけらもさうなまむらさひも君やうらあ
小燈文を改大信

カ
くらぶらうさうたのし女節もさあふさういよあつて
なみあう一あうはきわあはあうらて
うーの

カ
也節おねうむらうさういよあつてあうらて

むしらす

後人不知

白露のそよ風よすのち静夜あふく人かてふこそ
あふせんさかりあまらりて

友原長能

ひそひそなまよふあはれもとのよと秋梅はなほ
八月斗ふ初るゝ念まのちよみゆきあふ

惠孝又は師

萩の葉もやうらそよめとあふと初るゝあはれ
あはれそよめとあはれと秋の静夜あふく日と直は

新院屏風よ

よも人不知

むしらす

秋の静夜あふくそよめ静夜あふくそよめ
紀貫之

あふそよめとあはれとあはれとあはれとあはれと

陽成院御屏風よこころかり〜あふ

あふそよめとあはれとあはれとあはれとあはれと
亭子院のゆきよよ前裁うへんを初てこれ
よめとおひせとあひけし

伴野カ

裁そよめとあはれとあはれとあはれとあはれと
は撰

むしらす

よみ人志す

こそとくは秋のあきれと初霜の雪あひとくまじき
少将よゆけりつ時あまむいふゆりて

大貳高遠

お板の雲れ若くとふとせし山あらしつるらつたは海
延長御河月次は屏風よ

けしゆき

お板の閑れ清あふ新みそていまるをむらから月夜
屏風よ八月十五夜池あつあつ人あはし
ころあ

深きこふ

水の面よとら月あまをさす今秋を秋のりあかり
あふ月乃やとりてゆけりよ

よのふ

秋の月浪るそとけし出ふけりまらんと山れいであうん
唐義公れ家のうとあはれは月なりとら
池あつあつあ

深景明

秋の月西よあつとみえつるあきの秋はれ新あをさけ
唐融院御河月次は秋のりあかり

りとしげ

あすのこもやえんといふせんくともあはれは月

延喜濟時八月十五夜露人雨のたつとも月
のえん〜ゆけりふ 友原経信

家ふるふ光さるけさ秋乃月雲かへ〜とあひさるれ
曰御時中屏風よ ともひ

つらつらと秋の月のみえりあふぬ〜人乃あふ〜り
む〜らす 二孫りり

夜とともみ〜とあふ〜秋の月〜ひれあひ雲かへ
廣義之家ゆ〜弟ひ〜乃ららの出〜と〜と

よみゆけり 友原経頼
おつふ〜にぬ〜人出〜ねとあひ〜のあひ露や〜ん

前裁よ〜と〜ひ〜を〜あらゆて

伴勢

つらつらと弟の枕と〜と〜と〜と〜と
屏風よ け〜と〜と

殊〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
題不知 讀人〜と〜と

琴りきんれ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と

露き〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
亭子枕中屏風よ 伴勢

ふらふらとて行く秋意とあつらふりともゆるるる

之條乃らけのふれしとてなまら屏風は九月

九日れふ のやま

我々の菊乃白露きふとて世つりて園とぬん

むら むら

長月乃らけとてつむ菊れとてひさくたひのり

右大將定國家屏風より

あみね

中書乃らけの河音あらわじ山の木れとてくらひ

也長洲時乃山屏風より

はらゆら

風さしと我々夜ふりきとて萩乃下葉とてあまのり

二百六十一首中 曾祿好志

神さしのみむられとてふれ下葉とて色付のきり

むら 大中臣能宣

紅葉せぬとてけのふれ風乃とてやねとてさくら

りみらとて常盤れとてさし麻乃の道乃とてや秋とて知ん

しる 不知

秋風のらあともいふゆれけの乃麻れあふぬ日とてさし

輝をさしむけとて花落ゆとてはらまのりぬん

初瀬へまゝしてゆけりみらふ水保のりしはま
らりてりて物よ言はれぬらまゝりてゆれり

惠慶法師

紅葉みよとわづ我とまねるや川の川音ありと
都らす くらん人不知

みち葉の色をそとくられおれもみち川の水
大井川よみてゆりて方よとゆけりふ

よりのふ

紅葉とくふ程む言ぬとも小倉のれんはらじ
程不知 換人志し次

秋音はゆゆりて心ちりみらぬまきとゆれり
大井川よりみられりてととと

健守法師

水のわよ紅葉おきまゝのつ川瀬は浪のいね目さ
西宮たは巨家のの屏風は志賀乃山とえふつ
かれそととと女ともりみらなとわつあよ
ととと

みちまけの昔ありこれとて志くを林のまゝとと
東山よ紅葉カんよゆりて又の月れつとめてゆ
つとととよみゆらととととと

か
さのふりきふまはらうお葉れあはのふとふとやえん

天曆河内殿上乃板のことと紅葉見ふふ井

よゆらりけらふ 源延光朝臣大納言

お葉とてふおりてうりふん風のふとふとめえん

源兼光 之程不覺
上程少梅景明文

板さうみくと御らんみらうねらむけふとらふと

むらうす 御うやふ

河勢おゆりととあてならおまの空みそ秋のふとけけ

らふゆふまうとてゆきう時お葉れを乃水よう

つりてゆくれい 法橋觀教 後大徳院延暦寺

か
あはは秋のふとむとてふとふらひらふとふとを

二條右大臣村栗田のふとらう子れ念は梅お葉

のふとふとらうお 惠慶法師

か
いまうらのお葉るふとふとせむじは梅の目殺つむ

むらうす よみ人不知

か
さふとふとあじふと風は人まらひれは念そめき

延長河内中又雨屏風よ

はらゆき

か
らのおふとのお葉と秋音れやととみとすきうと

むらうす 僧心通眼

秋の嵐の急とてとれいみのあけ物そよよき

ついで

秋の嵐よあつとてゆりののせふとてふお葉のり

ふりそらむむらやけあけつらみらふ風のあえ

嵐のふれとてあつらげふお葉のり

ついで

右衛門格云

おまゝの嵐のふれむらやけお葉のりきぬを

むらやけ

のり

お葉のりよと尾もあつとてお葉のりきぬを

大井お葉のり

壬生忠峯

おまゝの嵐のふれむらやけお葉のりきぬを

むらやけ

のり

おまゝの嵐のふれむらやけお葉のりきぬを

お葉のり

平蕨盛

おまゝの嵐のふれむらやけお葉のりきぬを

おまゝをありけり

拾遺和歌集卷第四

冬

延長河内内約乃みれ嘆の屏風よ。

紀貫之

是引乃山々より志をれとりみらふとてまはとり

寛和二年清涼殿見ゆしふあらしけ

内山

よき人志す

細代本よりきつ河内ぬしは三日とてよすお葉に

河内一竹けり日 けしゆえ

うたふし志らるる雲とあつて思ふやと新あひれり

野一らす

よみひしらす次

新去月志れ志あしとをれのうところねは藤と鳴く

素良乃河内新田河よお葉ゆらんふ

新去ありけり河内とてふけりまかりて

柳中人磨

立田川のみち葉なる新あひらみむられは河内をじ

らり流るるしとてお葉とてけりて

僧正遍昭

唐よりき柳よ一ひしのことまら秋のこことたねあたり

延長河内女宮れりて乃家れ屏風より

けしゆき

けしゆきを葉にしれけしゆきを流のどとよま

屏風よ

平兼盛

河をゆへくたよとよまの葉とてゆ神とやん

百を方れ中ひ

源重之

あは葉よくれてはしほの玉はるもけしゆまふまふ

けしゆす

つたけき

とひの葉とてゆまふまふ河をせしゆまふまふ

よまふまふ

ひねりすよまふまふあまらうらうらうらうら

葉とゆへにまふまふまふまふまふまふまふ

水まふまふまふまふまふまふまふまふ

よまふまふまふまふまふまふまふまふ

まふまふまふまふ

葉のよまふまふまふまふまふまふまふ

まふまふ

右衛門権左衛門

霜とぬ神とまふまふまふまふまふまふ

橋のゆへに

池まふまふまふまふまふまふまふまふ

紀友則

月とてよあり 惠慶法師

天の東空をよみたる月影はんと知りてもあはれおの月

よみ書とよあり 源宗明

初とあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん
女とあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん
よとあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん

いとすけ

ゆらゆらとあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん
よとあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん

伊勢

カ

是門の山井よ書とてよあり

新院の屏風よ けしゆき

よとあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん

題不知

いとすけ

我宿の書につきてそあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん
屏風の忍よとあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん

友原依忠朝臣 後信長と若中弁
或統楊子云

我ひとあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん
よとあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん

カ

年ふれいとあはれとあはれ初書なるは宗ありやとあはれん

入道栲波の家は屏風より

うねりあり

見ゆせの木の葉もろくも葉もいづれも
都一らす

心もいづれもいづれもいづれもいづれも

人の中

意川の心もいづれもいづれも
右大将定國家の屏風より

白雪の心もいづれもいづれも

冷泉院沖時の屏風より

うねりあり

人の中
屏風より

わが心もいづれもいづれも

右清門書云

梅もいづれもいづれも
屏風の繪は佛名の心

うねりあり

心をいづれもいづれも
延長河の屏風はけしき

ふらふらとてはるる花のうらむしにふらふらとてはるる花のうらむし
屏風の繪は佛の影なりけりてはるる花のうらむし
守師とあるはるる花のうらむし
みくらお
うらむし
うらむし
屏風の繪は佛の影なりけりてはるる花のうらむし

の縁りり

人にいふやうにやとてはるる花のうらむし
妙院の屏風は十二月はるる花のうらむし
うらむしはるる花のうらむし

百をうらむしに 深重く

うらむしはるる花のうらむし
うらむしはるる花のうらむし

拾遺和歌集卷之第五

笑

天曆河内新交より侍ける時の長奉送
はめく由りくらくと

中納言綱忠

百代のよめきよむ初をたぐひま初と恋の初をたぐひ
うめそ平聖宗よ男はあてし時うらさ
ういよませしは 大中治能宣
らるる御礼に松乃枝きげし毒とやらよとをいじ
仁和河内人葺年舎れ奇

かまふ世の玉れよふとむつらとせいあつ世のうす也
贈皇太后の由うらの七巻よ昔部つ後平れ
見こたうーのことけりりてあましとあて
あつとまそ侍り 清原元輔
あまきいさうりぬのよいぬほに毒白つさのうめ
な氏乃いふやはゆりて

うーのふ

二葉らたのりきむきま日ごあうれ松のこのそとさ
うぬやれ七夜はゆりて
あつつむやとあ代とさあまいふくろあそあぬあり

右人将友原実資よりやうせ来り

平よりり

とてまひの松の七百ふるといかりぬり此種と云ひて
あつ人のうみやよゆりて

うらぶ

らとせと敷いさあす世中いさうりあは身と命を
友原誠信元服しゆけり来よりきり

源よりり

たぬいあつひのそせははし君らよまを
と善しといひていさうりぬりぬりぬり

徳のふ

ゆひそむるひのひるこ憲をたふらまを
天曆乃見くと字ふありたりゆりきり時
ふまか寺よ金流美命経軍巻とて信
書とてそまうりて所巻敷つふらせてと
いふよあそいあそきりそのすいあまはと
あまこれ方りてふまう中

ひねりり

あつひの松の七百ふるといかりぬり
仲算は解

急カたぐみふれ心そよふあつ夫乃下ふたのうらじ
承平四年申あはれカ一竹カの竹乃屏風は
新宮内侍

色カ之ぬねと竹乃のよ急の世といひ建ひりて君のまを
おのカ一カ美よ竹乃つえはりて竹乃つふ

大中臣頼基

一柳カ一カ母とてあたら杖あまはしくもつはし君うらひ
清徳公五十年カ一竹乃の竹乃の屏風は

りとしり

君カの代とゆふたふ人乃も石乃いふかあらん竹乃を
ゆえ

青柳のみりれいととり色いさつられ美とわらん
このひ

我カやとささる様れ花さりちとせみうとわしと
ねあ一人の七十年カ一竹乃の竹乃つえ

とけりて 一のふ

君カのたぬきふさる竹の杖あしはまことつさせぬうそ新
位山カの〇まそはさる杖乃まはれつるの世れはのあり

一條坊政中およ竹乃の竹乃乃五十年
竹乃の屏風は 小野好古朝臣

吹風カよよそれ新葉いらりてとまうとれれ新そのひ

三條を改むるに 廣義云

仍末も子日れ松の海ぬしよと云うらしとせと云ふんを云
也長洲河内屏風よ

けしゆき

松とのことれがと云ふよとのふかすいりもをぬり
都らしん

みか月のたうれと云ふからとせの余のすも也
義平元年中云の旗しつげの屏風よ

泰後伴御

見それと云ふよと云うつら八百と云ふの代の社集

天曆河内前載のえんせれを指りつ時

小聖云を改むるに

百代と云ふぬれの色あれつらむれ梅と云ふみゆん
廣義云家ふとく人くよと云ふの事せつら
よ事村のあれよとのひと云ふ事と

平急感

らしとせと云ふしと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
右の巨源のひとれと云ふ前載のせしつら
まげと云ふことと云ふ事の橋のと云ふすもと云ふ
きつ子と云ふことと云ふ事つらしてつげふよと云ふ事つげ

けしゆき

あつこひすゝとみむねのり子高鳴あつ漢の言秘を
天曆御時信様云ゆつえふてまつると
よませ給けし
うーのふ

おいそひらねりそあふこ世行る世あつたむ
こみいしを給けつういつろくといはれ
よませ給て
仔細

ちとせとせ何ち初らんうしとむあつるをそみへり
都ーらす
後人不知

あつ代いあはれなまねふとあつとせはあつる
見

頰の屏風よ
りせよき

うこたあつといふのよそとあつそみむをあはれ神の
あてはつてまつて

拾遺和歌集卷第六

別

春ののまよりきう人よあつさふりてあは
けうあそとあひりゆきう人乃うみ侍けう

よもひうしらす

去家あつ月とみううは心そやふぬつうり

むしらす

橋頭あよおまごあうふみまられて却し今をきうさ
あむらんえぬそらまらむおつをあらやまは
りのまよりきう人乃うみ侍けう

知て

曾祿のうしらす

病ののゆとさけいあはれらふ雲井のうふふとらそ
天曆御時小貳命由豊前はゆりゆり
そらんあそく候せらをゆふるを物たまふ
とて

御歌

な夜ふらわらそ今来そひとふは行らそひそひ

題不知

よみ人しらす

三つふり別あよおつう首の業れ秋風あふまよりえ
わつとてふとら雅ふはしめきんくうき物とまもやん
時と御歌志色人のよられいんを被そ露けりけう

天曆御時九月十五日廿亥くらりゆけりふ

非孝天曆王母計子中御之庶明也
御意

考う代と長月とあふ思ふすいふふとあれのあかま
十月斗にりのしまりけりよ

あひん

病ふあに何せとあひん志の時あふくら換よゆけり
物まらりけりよむまはれむき一ゆそあふ
さうらりけり ーのふ
わららとくうう雲れあふそあふは風とあま
むーらす ようん不念

わららとあふしあうそあふあひんはあまきうくらあふん
があひんあふのあふされやあふそあふのあまあふれ
りのまらりけりよそあふのあふあふそ
ゆらとて けーゆき

まらりけりよまといぬあふあふゆりこひ日あふそあふ
せらりのかりゆきふあひて物いひゆけり
らあふまらりけり相換よゆりあひてゆ
考ふつらりけり ーのふ
ゆらとあふそあふれらあふあふゆらあふん
あふらあふあふゆらあふゆらあふゆらあふゆら

予をそ

赤深出

行いしとてあまの物なりとて予をばらりととけけられたる
深のうらみはひる冬河のよきけそとてゆきしと
あはれいしとてうらみくつらうら

りともふゆみえられの橋をうらみあやこいしとて
うねりあすまのうらみくつらうらゆきしとて
ひきしとて 深きうら

わらわらとてせう橋をうらみあやこいしとてうらふとて
あはれいしとてうらみくつらうらゆきしとて

はくせ

月影あはれみとてしとてあはれいしとてうらふとて
あはれいしとてうらみくつらうらゆきしとて
あはれいしとてうらみくつらうらゆきしとて

天曆神歌

わらわらとてあはれいしとてうらふとて
天曆神歌のよきけそとてゆきしとて
あはれいしとてうらみくつらうらゆきしとて

あはれいしとてうらみくつらうらゆきしとて
あはれいしとてうらみくつらうらゆきしとて
あはれいしとてうらみくつらうらゆきしとて

おとがけみゆきに御めのくさ納云

けいじとくにやうしんがうけいしとあまのこまき

廿歳人冬河

東海乃弟葉とわきん今らもをくる神をまら

題不知

後人不知

わらしんあまこころはまふえいととく神のおん

まゆとあまこころはまふえいととく神のおん

源弘景りのまらけつふはくそ給すえ

三條を室を名

後人の病をゆいこころはまふえいととく神のおん

橋と頼師よありてゆりりまらけつふはく

継母内納りまらけつふはく

よらそそまらけつふはく

ついで

わまこころはまふえいととく神のおん

けいじとくにやうしんがうけいしとあまのこまき

とく神のおん

よみ人

けいじとくにやうしんがうけいしとあまのこまき

井のくまらけつふはく

つゆ

いふら物かすけくふ別海かかきく色かかゆか那
みられくふのうここれととる海りさるけり
は弾心乃刃とれさうやくつらりきりに

戒秀法師

飛ぶよしくとつものありきれいさむつこことふれ別
友原乃まらこめ豊前をよゆけり時あま
つらうおちあふしとそくさりゆきふしあま
かじきりゆとそ 藤原清正
さふんわらふゆわれらとけむいさるいさるい

肥後ちとそ清原元輔くさりゆきふ源満仲
せん一侍々るふうけりて
りこよげ

源満仲朝臣

つらりさふんさうねんおいてわらここととれさるを
返一
志はは来とそと海りあまらけりつらりゆきとそん
むしらす
よし人不知
をくさかすけり志とれいさる雲あまひひとそるあ

右清門 源満仲

命をさうかんとそいひいさるわらこ世ふよう有れ

はくすまらげん人のいふつらき

橋倚平

昔みづきの松原とてわすれぬ心をいりてさへ

陸奥守みくさりつげり時二條を改むるの

候一ゆくれいのみゆき

友原お頼

あまのまはれ松とてやうくわすれぬ心をいりて

みらふふれ白河関こえつげり

平兼盛

あまのつらさを都にわすれぬ心をいりて

實方おはみられふ下りゆきにしとて

つらさを

右衛門守忠

あまのつらさを都にわすれぬ心をいりて

つらさを

不知

あまのつらさを都にわすれぬ心をいりて

恒法云家の障子より

つらさを

あまのつらさを都にわすれぬ心をいりて

田舎のつらさを都にわすれぬ心をいりて

つらさを

長元元年二月十三日陸奥守去任中お局白河関長保元年二月廿六日由國三月到東

東より西へ行く馬をふゆきいりまゝのまぬりのまね
りふりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
りいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

伊勢

郭云種々ありた念ふひのまゝくそを流せりり
地まふみらふくつ乃あくとくそて

くーのふ

弟我のこゝろをひりいりいりいりいりいりいりいりいり
むーいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

まゝのこゝろをひりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

深云負り大隅(ま)うりりりりりりりりりりりりりりりりりり
みく月乃つりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

平急感

いりりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
秋後よゆりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

いりいり

甘節花我ふやいせいりりりりりりりりりりりりりりりりりり
いりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

重之

舟より弟の枕もひすの妹いりりりりりりりりりりりりりりりりりり

神降周つゝ一まよりけつふはありとありて
けつふよもつきたり けつけつよりとあり

思ひてとほさぬその心なれどとほゆとありあり
ならしむてのらひいとせむけり

贈を政大臣著

あつとむかひのこすあつとむかひのこす
あつとむかひのこすあつとむかひのこす
あつとむかひのこすあつとむかひのこす
あつとむかひのこすあつとむかひのこす

仁明天皇御心也
金忌
兼和元年九月十五日
富田御書

浪の上にあつとむかひのこすあつとむかひのこす

あつとむかひのこすあつとむかひのこす

あつとむかひのこすあつとむかひのこす

あつとむかひのこす

人唐入唐事此奇外之御書
上七奉一不可御書

拾遺和歌集卷第七

物名

紅梅

よみ人しらす

鶯乃とつら梅を折つ建いこもそつそつまじとすん

しらす

新の色とあつらふあそいあそいさつとつとつにぬてうらん

いよやひさき

なれとけし

物相越前権守法親
言贈之政官長良孫

あしつらやふささいおも神のけり茶の枕よ露いそけ

しらすり乃歌

けくあつあつとこれた常ふまらつとらとれあつとこれ

か佳し

つみひ乃ふれ

伊勢

つらつれおさあつといのふれそあつとみあつとあつと

あつと

あつと

こた色つらつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

しらす

あつと

世のまらしらすとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

あつと

あつと

柱てみる君とあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつと

川よあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

ふらふら

あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり
あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり

わやとねたのふれお蝶のふらあさうらうら
あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり

あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり
あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり

あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり
あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり

あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり
あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり

あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり
あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり

あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり
あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり

あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり
あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり

あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり
あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり

あまのまらちうさかたうさかたひまのりおきり

少佐上
少将

在
五
遍
照

忠
峯

カ作上

右

身と拵てこまめ我るれんまのくくじしとおれそ

カ作上

鳥乃子まていあううたうていぬらのもあすのあ

あうひのうやうり

とげん

カ作上

右

くまのしんしぬりあううせりいあらぬのやあう

はまうりうとあうと 志巻ゆゑ

カ作上

あうありぬるまはらりはむるにかうの下うりこくうとあう

かとりうとあう ねのうと

あうあう雲がうひち長ぬそののし巻ぬりうひあ

カ作上

あうすてわはしん乃とじ里のらうのあうあうあう

けいカみのうけ 抄うのうとあう

紀捕時

カ作上

うらと大の前さうあすみえううりれつみれあけいあう

むらう木 高向草春

神あひらむむらぬうやうのうらん勢田の川あああう

さうの本 とげん

いりぬれあうとくそううううらゆのきふうあうとあう

とれうんー 仙慶法師

貴月あまぬ浪りいかにさすなふらふらふらふら
り
すげん

ふらふらあまぬ浪りいかにさすなふらふらふら
らふら
ふらふら

面影よまうらむの君あはれなきさしほつらふら
ゆりうらむ
よきふら

ふらふらあまぬ浪りいかにさすなふらふらふら
にふらふら
ふらふら

池よりあまぬ浪りいかにさすなふらふらふら
まらふら
ふらふら

是川乃さきい水よねまにかりその水まらふらふら
いふたつさき形えとみる河まらふらふらふら
くふら

山たふたふらふらとみるふらふらふらふら
こふら

聖とれいさめさしかりまほいらあふらふらふら
そやふら
高岳相如

ふらふらあまぬ浪りいかにさすなふらふらふら
ふらふら
ふらふら

川よりあまぬ浪りいかにさすなふらふらふら
ふらふら
ふらふら

さうしめ

りみち葉は名れ色いまはむら秋乃さうあつりてあよ

やくさい

少雅上

おふこやくのめさういおわけてあやこものなを

きれ

けいん

少白

大伴黒守

わんやわいおふまのしもよけいみとれをあり

在し岸

ゆき花よさひつてあつらふいあまはよさうをれりて

しんしめ

よらん

るふはごめいのもそ再けおのせはさあまに

しんしり

りしすき

見よのさつふしひんよ花さうひつりよまて目殺お

目

さけいん

よらみ

あさぬいれきうみさそくさうひらわたねとさあは

ひかりあゆ

雲まうひかりのほもくとみえつる雲れあふよそあ

な一あゆ

うきやよさあはなとゆさうな一あふよあねま

とく

けいん

少雅上

目殺のさう月と推一らひらふのほくしんあまのい

らあつり

軍九日

とげん

^{少佐上} 秋風のよもれ山よりそのまゆふらりか

りみら解素

拾遺和歌集卷第八

雑上

月をん約て 中務之具平親王

^{少佐} 母よふに袖ふさうとをまねも月ふくこひふあまらん

清桂云歌屏風よ けしとゆき

^{少同} 心ふくあつとふふよえをれ月影とふれい神風あまきり

めふをらまきく約きうら月とみ約て

るに為基

^{少同} けらひらふ物ふふとのあふこひ月かうと母の卯らわゆ

法師よあふこひと思あら約らうけ月と見約て

友原多幸

か
ひつりてくみあつ申にうしほくもよあつ月那
冷泉院の東交よたりしゆきつ時月と約
心乃ちちとれこもものよみ約けつふ

藤原仲文

か
五の月の光とまらけふわあつ申のこくちけよきつれ
参後玄上うめれ月乃あつき秋門の前とこ
しつとせせしそといひ今くゆれ

伴辨

か
雲井そあひこくあ月あふと我やこくちゆれ

花山よゆりて約けつふこまひとれゆとつふ

しつりきれい 素性法師

ね
りら月の約りなき出つたうくそ山とえけつ

屏風乃志よ けくゆえ

か
常よりとてりまらるれあめれお葉とあてつ月け
ら

か
久堅おまらるあつ月は通いつまのあふまやとらん
庵義公後院よよみ約けつ時ちよと約ち
んてめあつあて水と秋月とあつとよま
せ約ちつふ 大將海時

か程下

あ庭よやう月あふううとあつじやあふのこふん

か程下

式部公輔文河昔

水の面よ月あつじとあつせい我ひらりやあひさほ

除目のつゝい命ぬたをうりつゝりき

りこまけ

か程

年毎よたえぬ波やほあういほゆくやあつとつてん

田融院沖河川屏風方あそつりけつてふ

そくをりきり ころこふ

か程下

わらわの家よりあつじあつはあつさなるん

権中細玄敷忠うあらうりの山屋乃あつは

か程下

ふくさうけ約きり 仔細

若羽河せうしてねすあつていんあつみえとすあ

中務

か程

あつらういあえせぬあつていみまのあつてあ

題不知 けしきあき

か程

あつらうあつていあえくといんあつ玉のあつてあ

延喜十二年沖院沖屏風に帖うああせ

ふらりて

あつらうあつていあえくといんあつ玉のあつてあ

入字寺ふんくわあしゆりあきりいあつて

游とよみ侍り 右清門簾云任

游のよみ侍りてもくぬれとも名ふあれて程雲をけし

部一らす ころ

か狂下

ろ免とがあそくは吹風のそよよはれもめふをひ

野家小歌交度申一侍考ら小松風入歌

琴とよみ侍り

歌宮女侍

か同

琴のねは峯れ松をせよせしり世のよらりよそあきん

か同

松風の音いそろくものねとひけい子百れらしをすこ

天曆沖時名あつ西と巾風ようせ給く

んこあもてまうせなまひけらふあうさん

忠見

か同

尾上あつ松乃ともあからあひは浪の急そ風とあま

延長沖時巾風は けしゆき

か同

あつと吹松風いそいそ池のみさうまらうさ

日沖時大井よ新きありてんこはあまをせ

れを給ひけらふ

か狂上

大お月あつ松よこもむいふあまやありしうこ

任者ふらよのつららの時祭一侍考ら舞合

てらうけしとてよみ侍り

をよしのこゝろよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那
五條乃内約はく咲の屏風は松の海はひらり
あつたよと
伊勢

^{少下}海よのこむらうら松のあつたよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那
物まよりけいんよあつたよりつらねるは松の海はひらり
うらまよれこゝろよと

うらの海よのこむらうら松のあつたよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那
うらの海よのこむらうら松のあつたよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那
うらの海よのこむらうら松のあつたよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那

あひこゝろひつらねるは松れ中をせとくふらうら那
うらの海よのこむらうら松のあつたよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那
うらの海よのこむらうら松のあつたよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那

源道深
うらの海よのこむらうら松のあつたよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那
うらの海よのこむらうら松のあつたよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那

世中と怪者うらと思ふぬふりふよまわすわつらうら那
うらの海よのこむらうら松のあつたよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那
うらの海よのこむらうら松のあつたよりつらねるは松れ中をせとくふらうら那

か佳下

いづこふ世よふ物こち妙れ松も我もやなとみん
あーれうろやしらと舟よのりてゆり
けつふ 深為意

か佳下

よどりの船名乃浦の松糸の流をたしそととと
野ーらす しみ人不知

か佳下

りるに舟いまそふれさなきうすあけりるの志さ
くらとのいさ後のい乃志事わとれて今のみは
山寺ふまうりもろ囃よ日くし乃鳴結たれ

た大將洪内

か佳下

物なりを日くしれなまゆやえぬまことんやん

天曆河内屏風の急よなりこれ橋柱ぬん
つふのこけうこありけつと

夜奈ふまよあ

か佳下

薫まよりこゆあこれ橋柱昔乃何との志るあ
工は為基うりといなりふまそそ事りけつと
尺のけみありもろ紙ようさつきそ竹葉
しんこあす

か佳下

きよまそとみろふ波のまきうみあ道は彩とふ
橋のこりこく人ひまあふ志のいて物り
けつととれふはゆり物とそは女ののいひ

つらげり

^か馬ふよりの雲かふぬねとも空の月のめづりあま

題不知

貫之

^か年月い昔ふゆすありゆきと雲ふらふらり

清徳云月林寺ふまらりげりふをよきてゆ

くそくくくくくくみゆきり

藤原後生

昔わらり梅のふは月乃林のめづりゆき

菅原乃と伝くゆりゆげり来くれよ

みゆきり

^か往

久堅月のうきもむらり家の風とよきせて

題一らす

人まら

^か月草ふ衣いよむ物露よぬきての夜かろいねと

^からわいふいふよきりてふむらり物よきり

^か久前あめあまぬとあやとわらぬとれむとれもあき

とく浪いそと夜よきあすゆきと海もあつら

りあういゆりけりあ

くされぬはらひのうらなこうとれゆい衣きてるえん

たりゆきゆげりみらあきくくくゆきり

贈る政大臣

天津星乃とやそりしありあつて世にうらたも思はれぬが

うらた本といふこと

りも本とみせありてはゆひも世にうらたも思はれぬが

けふとて世にうらたも思はれぬが

りもつらうけり 平定文

うらたも思はれぬが

中文長根奇此河屏風り

伊勢

本も思はれぬが

天津星のあまうらたも思はれぬが

人まら

りも思はれぬが

うらたも思はれぬが

よやうりてゆきうらたも思はれぬが

うらた

嘆乃れ免れりたりたも思はれぬが

物まうりけり人のりも思はれぬが

よやうりてゆきうらたも思はれぬが

あさうぬ契むすうらたも思はれぬが

うらたも思はれぬが

しつせつ

みづのふらふら此秋あつとあつとをせし人あつとせそ
對馬守をのあつとみらうめねさうとらゆき
は河よとともまらのおは乃毒肥前うらみ
てはうらうら

ねさう鶴雲おれ春とゆらり梅かよふとまはらと

詠天

人まら

定れ海よ雲れ浪ぬら月の舟星おわよらぬらあ

もよらあ

河のまらうまこみこい玉藤うらうらうらぬらあうらぬら

じよらあ

びらうれとこいのこいこいまらぬれ橋原乃とらふら

詠葉

うらうらりきん人をわらうらみとれむらうら所草は

むらうら

けらゆき

念とこいもとこい足月乃山とこい球よけあつ

伊勢乃とゆきよゆらりとあつとて

人まら

ねさう海よふらりすん日影のうらうらのとまらぬ

天曆十一年九月十五日舟星あつとらゆけら

内よりとつてしめてぬまひすとして

河原

^{少姓上} 宗子延二年為宗子天曆才の母

園離院河原時宗の母

宮りつとふえつ

新宮女御 徽子 或る重明女

^{少姓上} 世よふとふえつすうふ首娘の母

あすの女とほむつ時よ

人まら

^万 河原とみし女をいりつてあすの母

小條た大臣 許子 まうりつてのらる家

けつつるつ時つと

小野 文太政大臣

^{少姓下} をいりつてあすの母

た大臣のつらみよのた大臣 禊後 のむと

娘とつていのこととりにとせつと

屯宮 九條右府才女母曰高光 三長死去後西宮た大臣

年とくあらあじつあつてのつあつて

た武園章このあひとつとつと

よりのあつてせつとつと

のしよら

仍来乃世系ももろやとて病のこころみもなむとて
むしーらす 申務

拙てんろ系系を世と志せけつをさていふゆけは病
の中ふくこころひ病きつと系ら人のさるひ
よをせせゆきれい ゆけのりーとん

病の命行とふいおくと志と又とやとふそは病
神明寺は色々ふと常取まけけく病きつと
けろくゆきれい りとすけ

^{か僅下}おぐぬ命やれふのひおんをりれ病とむら病とて

二条右大臣た述書長依伯清忠とめて
ろよ年をゆけつとのそむりゆけつらひ
ゆとさりきつらふくよみゆき

^{か同}ろりなと波の病よむと志して人の志りふあつと
くわゆらへりきつ年えくゆとて書はあり
けつとんく りとすけ

ろ病よゆらとれあてまふらとゆらとひのがおと
けつとふ病つららとけつらら人のさるひ
よをせせありけつとんく

源景明

少下

いんから世の中ふきしとあふとらふあはるなり

郡一らす。ふみ人あふ次

帯におぬあをほそおとありあふあはるなり

よの中とくひとてあそくいらあふあはるなり

男ゆけつ女とせらふけしゆそ男あはる

あふきり

あふのうらあふひよあふあはるなり

あふひとあはる

拾遺和歌集卷第九

雑下

あふとあふあ秋あふあはるなり

あふあはるなり。紀貫之

少下

春輝よあひあはるなりあはるなり

元良乃みこあはるなりあはるなり

あはるなりあはるなりあはるなり

あはるなりあはるなりあはるなり

あはるなりあはるなりあはるなり

あふあはるなりあはるなり

春のうたのひさふらつり物のおとれ秋をまはる

園騎院のうた常と郭ふとるまはる

せと作れはまの 大納言朝光

わらうにまはるまはるまはるまはるまはる

まのこまみねよといはけり

春後作詞

^{かほ上} 白露かふらそとつるまはる下葉かふらそと

こまふ 月つね

^{かほ上} 白くまのまはるまはるまはるまはる

まのこま

^{かほ上} 秋霜かふらそとつるまはる下葉かふらそと

又まふ ことし

らそとつるまはるまはるまはるまはる

こまふ まのこま

松とまをそと秋ふらひまはる下葉か

又まぬ これひ

まらまのまらまのまらまのまらまの

こまふ みのね

昔よりいひまはるまはるまはるまはる

又まふ ことし

心いつらき 源經房朝臣

あはれなるおまじいこころの晴るふとくも成よけか

返一

あつも晴ゆとくしてんついなを新れねやを解ら
屏風は法師の舟よりてこころいふたうお

右大將道總母

か佳下
あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか
肉より人の家よゆきうお梅とやせねけつふ言
あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか
せらせゆきう

勅命いふとくうに言れ着いとあつも晴るふとくも成よけか

あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか
あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか
あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか

あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか

か佳上
あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか

あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか

あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか
あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか
あつも晴るおまじいこころの晴るふとくも成よけか

まゝ

伊勢

そめそそきしし河のふあはむゆーそれらわざう
能直よ車はなもとこひよつらてゆけふ
ゆすすといひてゆけふ

藤原仲文

か佳下

そらそらふ人ありたれもよそとふゆー

返一

よーのふ

か同

けしとくはむもよそらふもよまよそらけ
唐義公家のこもあは河とさるまよあ
とれも乃馬河うふ

惠慶法師

か佳下

難波の蓋ふもれまよけのまひれ約も河足
けのこふゆけら人のりこてよみゆき

あかん

なふこもきりあつたきもよ河ふあはとせねあかん
はらふゆゆらけらけらこらんよあひ
ゆー

教ふもゆきそけの國乃佐名とさくまふもゆき
なふもゆきこへにあはゆらありけらふ
りこもゆきゆき男れ河とらてあかん

か佳下

さしあふなりてみちよのひく物きういさり
けあて年ころいえのさあまつつものあとい
つらーぬまの男乃うみゆげ

あてあはきりといふもいふなぬるす

返一

わけしようむそそわ色きんあふりよの酒いさき

御息所幸

云取見

諸中皆同

村上藤景殿

代明也

壬子年

藤景殿

重明親王

あかりふけり日書とさころけり志と取つが
よりまいつい殿乃女河のころけりうありき
藤景殿とわらふ

藤景殿可助

り人のこみとよはのやーとい志そと社のおうり

地獄乃ういけりあつとらん

菅原道雅女

ころを河ころみらかともふりきりあや名とわさる

こそ乃輝むすあふをささく物きういさき

のほれまき無勝快よたりてゆげうらるい

んといけりうーゆりれ

皇太后名実権本國章

かつとまきのうめあはれつさきい輝のねりあつと

源重之り母乃道乃ふよ物きういさき

か佳下

か佐下

ありまゝなりし心のかりてしきくすゆてえれ
しひゆえそのかりとおろしむといひてゆけし
をこれ女のよみゆき

万

はるあやと思はしむひてはわつらふよはのあ
野ーらす 人まら

か佐下

ふゆうら白くねぬ後芽糸垣むしあふたあゆま
るあしといふまをむらとせりのお目り白はか
よみ人ーらす

はのこゝあまらとみは梅は川おをれのおし
けり

か佐下

あまらとらとみはは河さすふとらあ
あつ日と糸河糸まうりらとらきりに
こいめりけし 悪き法師
世中いあーきねあよととおろし河のむゆき
ゆりやあさとらん

か同

仲文

河柳いふみりふありのとらとらあ
天曆河時一條橋政義人なりそゆきふ
とけてはこあそりけつあをそまうりて
はうすあやかりゆれいれいとく

さああけりあつらふもつとをさやうりこむに事だ
みらぬふにりりりこわらさうつとふ
よ重くういふわあさうりこむてい
けうけう ねんり

少佳下

みらのれあさの系ねあけふあこりささ
廣義云家のうと給よあひん乃あさ
ひらうささる 友系為頼

少佳下

あさのたつれはよふさうあさのあさ
はさうあさあさあさあさあさあさ
ささあさあさあさあさあさあさ

少佳

少おさけりさささつきてゆくとささひつら

しりりり

八條のおあささうらあ

少佳

はさあさあさあさあさあさあさあさ
見さけよ年ねさうゆてゆ

りす

少佳

あさあさあさあさあさあさあさあさ
大隅守りらあさあさあさあさあさ
こわりれつさささうらあさあさあさ
けさあさあさあさあさあさあさあさ
あさあさあさあさあさあさあさあさ

老そくをばぶきいふけとねとみろむをむいむい
ふのこいふらりてゆうはまじゆはまじり

徒頭句

ますく見そこなり影よむひおそくんの時ま
あゝぬたむさふいあふくちらまれ

栞平人まろ

ゆとくこみんくくふいふ何りむくもまねの
あえくろ慈ろくくけいこのころ
ふのそふ弟うゆとのこまろ何りそあまくと
まろくまはむい見まろくふせん

女のりこまよりあつらひらふまこくりに
けこくあゝあゝ

添けあま

あつさゆもたりはすあてりりくくくくく
くむさくめそそあすくくまけ
かりこい

よーけあふそそまろこい

人まろ

らゝあゆ 我葉まろくくくくく
あふた 弟も ちひまろくくくくく

人きげをりしむらさき花の 世よふくそ
とこのえれ 松のうらみ ねむさきと みどりの花
あきとてん 雲のうらみ 志くはる ありらむと
ゆきかよひ ゆきとらあせ たりよけり 舟のうらみ
とみあふい わさきまふ 志つめ ありつりあ
うらとてん ねむさき花の 物にたりか

海 — 一のぶ

世乃あつと 志くうらみ 早すれと 志くうらみ
あきとてん 志くうらみ 松のうらみ 舟のうらみ
とくうらみ 志くうらみ 志くうらみ 志くうらみ

くれぬの 志くうらみ 志くうらみ 志くうらみ
人きげをり 志くうらみ 志くうらみ 志くうらみ
とみあふい 志くうらみ 志くうらみ 志くうらみ
あきとてん 志くうらみ 志くうらみ 志くうらみ
ねむさき花の 志くうらみ 志くうらみ 志くうらみ
ゆきかよひ 志くうらみ 志くうらみ 志くうらみ
とみあふい 志くうらみ 志くうらみ 志くうらみ
うらとてん 志くうらみ 志くうらみ 志くうらみ

月ふあてとひくくよりとすにわうくくと
とこがいの乃雲わらうぶ^{つか}みふひの^ちををきさひ
我もわらひ

あづねをこれ物のいわけつもの志のひてつけ物
てこのころありて甘くそこして物きうい男
のよみ待ける　よもくわくは

いもふとこし　いさししと　やなとれれ　あひやすすれ
あつとふに　うりやくと　まらち聲ま　ゆつれくそそ
かりと袖の　雲かえふと　ふらえねと　我のひあひ
まけとふと　くそとたひ　ひひひとを　けてわの風の

あふりく　あふりく　ゆふらとり　うもふく
あふりく　神のい　おきけそ　あともあふ
あふり　うひあひ　あひら　あひら
うひあひ　こもてあひ　あひら　あひら
あひら　あひら　あひら　あひら
あひら　あひら　あひら　あひら
あひら　あひら　あひら　あひら
あひら　あひら　あひら　あひら
あひら　あひら　あひら　あひら
あひら　あひら　あひら　あひら

秘とむと世とけくもまもゆされ 母のまもる
なりとありはん

東融院時おのまもるはむひまうまう

て養せしをゆりう 東三條を改る臣

わまされ 天曆才五皇子 天徳二年十月親之宣旨 乃や人とそのまもる

身とあて 康保元年四月中宮安子崩同日四年五月村上崩 乃まもるをまもる

あがりき 康保元年九月五日防安和二年二月七日任中御之兼 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

あをせ乃 元以三位中将 乃まもるをまもる

貞元三年三月廿六日中御之為光朝光親二位官月加任之細云

奉れ

天徳三年十月防安和二年二月七日任中御之兼

天徳元二三年

安和二年八月十二日防安和二年九月廿三日即位親正三位防官賞

天徳元年九月五日防安和二年二月七日任中御之兼

土月廿七日中御之兼通任内之任同覽天徳三年之任之臣聞白

ゆりてのまをて ちつじとて ちてくまう ちあうしん

同年十月十日遷洛中御定夜將

祚を月 ちすさあふ ちららて ちあうち

ひきさうち ちつて ちあれち ちて二月よ

ありにちり ちあふちく ちああふ ちあひやま

あきくし ちあもあや ちあさし ちあうち

ちああ の ちああを ちあひちり ちあてす

ちあひに ちあうれち ちあひし ちあああ

ちあすちれ ちあをちあわ ちああち ちあ日と

ちああを ちああちり ちああす ちああつあ

ちああち ちあああ ちああち ちあああ

年れちらふ ちああ風色 ちああち ちああち

ちああち

これち河返ちちあああち

けああち

いふせん ちああち ちああち

天元二年 貞元三年 六月廿一日初参内八月詮子内

十一月為女河 天元二年十月二日任右大臣即日

後二位同二年三月正三位三年六月百皇子

誕生永觀二年八月立身一皇子懐仁親王

為皇太子 寛和二年六月廿三日太子踐祚

栴波七月後一位准三官列三之上永祿元年
壬辰七月薨 卒二



拾遺和歌集卷第十

神樂奇

しるし葉よゆふとくもそあまの神乃みまふよひ
栴葉のそとくりやあまのそとくやそとくらふゆあま
んくくはあまゆ物とそ神のそとくはあまゆ
みてくくはあまゆすあまはますとまをうひあまのそ
相坂とくわくくそとくあまのそとくはあまゆ
よとくあまのそとくはあまゆとくはあまゆ
あまの神ふるや男れそとくはあまゆとくはあまゆ
あまのそとくはあまゆとくはあまゆとくはあまゆ

たつこえ

わらわのこゝろにふかき水はたけなすも
さうりにならそめいおふしはういしおんあて
まふりりおふしはういしおんあて
任者のさうもせはむ物は神々やんは松とせん
あふ人のいへ任者の神はあせん
た昔も昔も高遠な天はさむまうてけりて
の後よまわちりよりそちちちちちちちち
みとりてまてさうりけりてあまてみゆけり
くかしてゆきそそのらちてあまてみゆけり
ゆふもとれとて使はるにゆけふとてあまてみゆけり

とまうふまうて 安はし神

か佳上

天をうけり神のあひまひとあふくともまうの松

恵慶は神

か高

我々の神代のももこもあひ昔とまうすはるか昔

とらさるとみゆて 重く

くせあつたつとく人おふのちとせむいとおふねい

深遠古期はこちとせてゆけりお

りてすけり

おひとはまじりて聖の糸はあやちとれはふあらしとあふ

ひえり社とてよみけり

僧部一實因

福さうらひえれ社乃ゆふ子きこふれれとこよめては

恒徳公家障子 源兼詮

ちほ乃みそれいせよぬわん社さいさうらうれお松

栗田右大臣家乃障子よりうされは後一

しうふあをむかひさうきうあ

平祐挙

みそれすうきふう勝よおると細の社のをきひくはら

部一らす 人中のり

らるゆの社のおとらいのららあもさうたああふん

ふらふ社とあひらあまのそ奉てゆれおとらあ

安和元年大掌舎風俗あうらふ

大中臣能宣

あう代乃あうれおのひあとのそげら雲れおらあ

し海のなうら山れあうてはのらへらあゆあ

いしうらふ ちみん一らす

うこれあうあうらふあああああああああああ

見うれお 能のふ

らるゆの社のおれらうらうらうらうらうらうらう

後人一らす

美世なることらぬわらふことのみをばはらふことなり

こころ

夏代をみよとておのむくまにむとにりおすこそむいよら

あきくさ
うー宣

見つゝはむれはくさくさなうそ多しうらす万終えん

みれ山
うしん不知

言終むとおの中ふねくつりうさひよらおれあきく

こみ山
うーのふ

見えけくともさくくのみふらりおきもあやうたのこ

松う海
清原元捕

らしそふ松うらさくさむしおわくふあひさゆさふあじ

ねりのい海
うりのこ

か佳上

とくちあつ時とゆじかあふとびらおりの溪おまのひる

天禄元年入葦合風俗子世能心

能宣

とくちあつ時とゆじかあふとびらおりの溪おまのひる

いよあつらふ
う終りのこ

出たけらわたらふれらうさむくさくあまのひる

見終のこ
うーのふ

初めらふみよとておのむくまにむとにりおすこそむいよら

いさよ

きふりいさよいさよいさよいさよいさよいさよいさよいさよ
いさよ
中務

美世と阿比ときくみじういさよらとせのけららり
あふあのみ
うねのり

年とよこひとさうちのあのみたのついで
うーあのみ

みふさうさ回乃里れ枝あまはけいともはきく美世
いさよ

象河のとげさあれ危れいさよ新そとまよはら
松うらさ

けいさよさうあまはけいともはきく美世
延長元年八月廿日辰卯の清実の六十歳

中納言恒依書しつりつ所の屏風より
可

足引の山れ柳葉とけいあうひふらうゆけのさ
後とていさよいさよ

あふひらとていさよいさよいさよいさよいさよいさよいさよ
延長元年庚子院乃美日小御女つり
國の官女一首号いさよいさよいさよいさよいさよ

り佳上

藤原忠房

うりまききふるき日れカをいめと神をうけと
まのいれり先

